



デザイナーになるまで・なってから

◇今回は、山本紗弥さん（多摩美術大学プロダクトデザイン学科）のレポートです！

私は2012年に関高校を卒業し、その後美大へ進学、現在はインハウスのプロダクトデザイナーとして働いています。関高校には少ない美大進学者としての体験を紹介したいと思います。

●高校時代

幼い頃から絵を描くことやモノづくりが好きだったので、美大に行くことは漠然と決めていました。美術科のある高校と迷いましたが、普通科目の勉強を一通りしっかりしておきたいと思い、関高校に入学しました。

とは言うものの、勉強が好きじゃなかったもので、教科によって得意不得意の差が大きく大変でした。毎日のようにあった各教科の小テストは、当時は嫌でしたが、コツコツと取り組む大切さを実感しています。

●大学受験期

美大は筆記試験だけでなく、実技試験があります。具体的には、デッサン、色彩構成、立体造形などです。



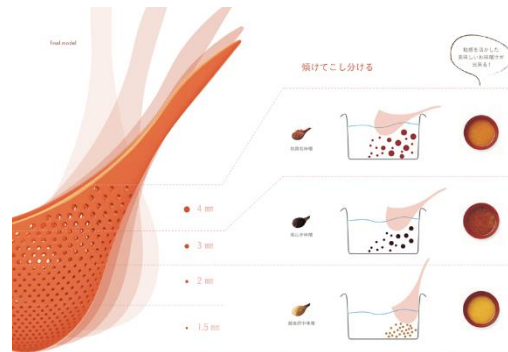
実技試験の対策は、東京の美術予備校の講習に参加して学んでいました。1日7時間、石膏像と向き合い黙々と描いたり、与えられたモチーフを自由な発想で描くといった生活を送ります。絵を描くのが嫌いな人にとっては有り得ない事だと思いますが、私はとても楽しかったです。

また、同じ空間で自分以外の受験生も制作をしています。自分とは違う発想の人の作品を見て参考にアイデアの引き出しを増やしたり、浪人生から技術を学んだりもしていました。

●大学時代

多摩美術大学のプロダクトデザイン学科に入学しました。課題は基本的には、与えられたテーマに沿

って作品を作り、講評会でプレゼンテーションを行うことを繰り返します。写真は4年間で実際に私が作成したものの一部です。

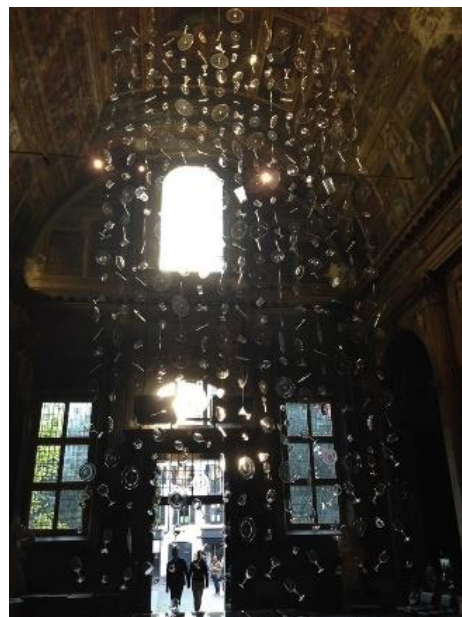


制作以外にも学内外問わず、様々なイベントに参加したり海外にも何度か行きました。アメリカへ行ったのは、KAKEHASHI プロジェクトという外務省の推進する事業に参加した時でした。自分の作品について英語でプレゼンテーションしたり、反対に現地の学生に紹介してもらったり、様々な大学や美術館、企業を訪問しました。ちょうど国際交流基金のページがあったので、見てみてください。

http://www.jpf.go.jp/j/project/intel/archive/youth/kakehashi/dispatch/2013/sce03-01_tamabi.html

また、4年生の時に個人的にミラノサローネへ行きました。毎年イタリアで開かれている、世界最大の家具の見本市です。メインの大きな展示会場だけでなく、古いお屋敷や教会でも様々な展示が行われて

おり、町中がデザインで賑わいます。日本では見られないものが沢山あり、毎年行きたいくらいとてもいい刺激が受けられます。



●就職後

大学の課題では、具体的な設計条件もなく外観をデザインするだけのプロトタイプで終わってしまうものも多く、物足りなさを感じる事もありました。

留学や大学院へ行こうと思ったこともありましたが、「実際に量産・流通している商品をデザインしてみたい」と思い、就職することを決めました。

そして卒業後は家庭用品メーカーに入社し、製品のデザインを担当しています。

最近、初めて一からデザインを担当した製品が発売されました。家族や友人をはじめ、身近な人に使ってもらえることに、やりがいを感じています。

制約が多いので100%理想の姿にはなりません、プロトタイプとは異なり、自分が思い描いたものにちゃんとした機能がプラスされて製品になるのは、とても面白いです。

他には、トレンド収集も仕事です。セミナーに参加したり、展示会を視察したりします。いつでも新しい感性や価値観に触れインプットすることが、良いアウトプットをするには欠かせないと思っています。また、色や素材のトレンドだけでなく、ものづくりの製法も日々進化しているので、新しい技術にもアンテナを張るようにしています。

●最後に

以上、本当に私の経験の一部を紹介するだけの作文になってしまいました。。。

「こんな選択肢もあるんだな…美大って、デザインって面白そうだな…」とあっていただけたら幸いです。

今までの話とは反対に、私がこれからしたいことは、家具や照明のデザインです。そのようなメーカーに転職したいということではありません。自分のためにデザインしたものに囲まれた、最高に居心地のいい家づくりをすることが長期的な夢です。そのためにも今はインハウスデザイナーとして、良い製品を作っていきたいと思います。

これを読んでくださった方も、夢にどんどん近づきますように。ありがとうございました。

http://www.jpif.go.jp/j/project/intel/archive/youth/kakehashi/dispatch/2013/sce03-01_tamabi.html